

清水將之 著

私説 児童精神医学史

子どもの未来に希望はあるか

高柳みずほ

本書は、1965年にわが国で初めての精神科思春期外来を開設されて以来、児童・思春期精神医学のパイオニアとして学会を牽引してこられた著者による児童精神医学史である。その題名にわざわざ私説とつけてあるのは、本書が網羅的に歴史を書き綴ったものではなく、「子ども臨床」という造語が示すように、著者自身の児童精神医学観が裏打ちされているからであろう。

本書は二部構成になっている。第一部「子どもの未来を考える」では、「子どものこれから、日本では」、「不登校の歴史」、「子どもと災害」という構成で著者自身の臨床医としての歩みを振り返りつつ、子ども観が年代によってどう変化してきたかを論じている。著者の学校精神保健における取り組みや、あすなろ学園での多職種連携医療など、他領域の関係者と「子どもを見守る大人同士」として協働の関係を作り上げる際の心構えなども述べられている。

不登校の歴史では、1950～1960年代の本邦の児童精神医学史を辿り、驚いたえ子氏の「早期幼年性自閉症」の発表、第1回精神病理懇話会(比叡山シンポジウム)での自閉症児供覧、児童精神医学会(現在の児童青年精神医学会)が組織された経緯、そしてその後「自閉症」に続き「学校恐怖症」への注目も高まっていったことなどが述べられている。「発達障害」と「不登校」というこの分野での二大関心事が、半世紀以上前から不即不離の関係にあったということは、評者にとっては初めて知ることであり驚かされた。

子どもと災害に関する章では、著者の行った阪神淡路大震災以降の被災地支援、そして現在も継続して赴いている東日本大震災被災地での活動にも触れている。

後半の第二部「歴史という座標軸で子どもを考える」では、「私説 児童精神医学史」、「子ども観と

文化の移り行き」、「子ども史略年表」という順に、膨大な国内外の資料を基に著者の見解を加えながら解説される。児童精神医学前史として、「子どもは tabura lasa (白板) の状態」と述べた J. ロックや絵本「もじゃもじゃペーター」の作者 H. ホフマン、「アヴェロン野生児」の報告で知られる J. M. G. イターラらについても紹介し、「私説」としては H. エミングハウスを児童精神医学の鼻祖としている。

一般に児童精神医学の祖として知られるトラマーについては「子どもの信頼を獲得すること」、「子どもの育ちを支えているおとなの信頼を獲得すること」などの言葉の引用も含め随所で取り上げている。

後半部では、本邦における児童精神医学・医療の今後として、「二つの願い」が示されている。児童精神科の臨床家から一般精神科医へ伝えてほしいこととして、＜発達＞という視点を、児童精神科医療を離れた後の成人期の発達障害診療でも維持しながら治療的配慮を行ってほしいということ、虐待などで負った幼児期の深い心傷は、終生背負い続けていく危険性があるということ、を挙げている。最後に、子ども臨床家に求められる基本的資質は「惻隠」と「温藉」の情念であるとまとめられている。

本書を手にした人は、著者に案内されて世界から国内までの児童精神医学の歴史を旅しながら、随所にちりばめられた先達の知恵や助言を得ることができる。またさらに深く掘り下げたい場合には、それを叶えるべく豊富な文献リストも添えられている。児童精神医学にかかわる方のみならず、小学校教諭、保育士など子どもにかかわりを持つ多くの方に、ぜひ一読していただきたい書である。

(有沢橋病院精神科)

●A5 180頁 2018年3月 定価: 本体3,800円+税 金剛出版刊